

親子で読むおともだちの子育て雑誌

AERA Kids

with

4・5・6
の
おともだち
おともだち

身につけさせたい
学習習慣・生活習慣

おともだちのママさんへ

入学準備10のチェックポイント

おともだちのママさんへ

【お受験】の基礎知識

おともだちのママさんへ

読んでおきたい学習のすべて

おともだちのママさんへ
おともだちのママさんへ
おともだちのママさんへ
おともだちのママさんへ
おともだちのママさんへ

学校にすくになじんで
学力も伸びる

【書談】とは？

入学までに
やっておきたい
これだけのこと



新1年生までに
実践したい

学習習慣

2

パターン化された計算ドリルより、遊びの中から数量の概念を体感させる

さんすう

「見える力」と「詰める力」、この二つの力が
算数脳を鍛えるという
「花まる学習会」の高濱正伸先生。
それは、自然の中に散らばめられた「数」を、
遊びの中から学ぶことから始まるのです。

練習問題だけでは、
大きな落とし穴に落ちる

新1年生が最初に触れる算数は、「3
と5を合わせていくつ？」といった程
度のもの。これなら、足し算を知らな
い子でも指を折って数えることができ
ます。子どもは暗記が得意ですから、

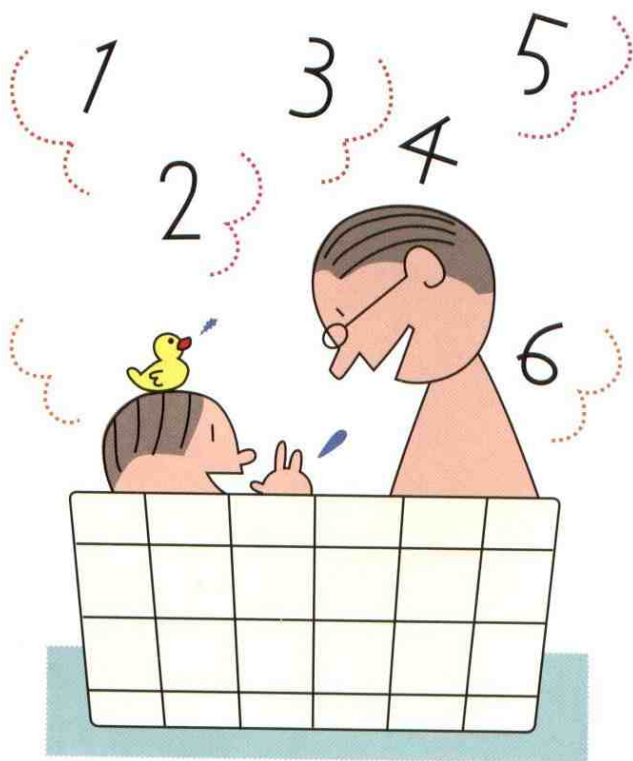
九九も大丈夫です。ただし、この調子
でやっていけるのは、少し先になりま
すが、文章問題の手前までです。
子どもの教育に興味を持っている親
御さんは、幼児の頃から計算ドリルを
与えています。ドリルはクイズと同じ
なので、きつと楽しみながらやり、次々
とクリアしているでしょう。でもドリ

新1年生までに、**ママまで達成しておこう**

一、百までひとつのミスもなく、
声に出して数えられる

二、お片づけなどは、
数をカウントしながらさせよう

三、外遊びを思いっきりさせる



ルを繰り返しているうちに「5+3は
8」と暗記してしまい、スラスラ解け
るように。すると算数力が身についた
と考えてしまいますが、これが大きな
落とし穴になります。先に言った文章
問題が「算数の壁」になってしまいか
もしれないのです。

この一因は数の概念がしっかり理解

できていないからです。たとえば、ミ
カンで8個数えられる子は「8個も食
べるとおなかがいっぱい」というように、
数字の具体的なイメージ（数量）がイ
ンプットされています。文章問題では、
何が問われているのかを頭の中でイメ
ージする力が大切。だから、数量を感
覚的に理解する力が問われます。



花まる学習会代表
算数オリンピック委員会理事
高濱正伸先生
Masanobu Takahama

1959年、熊本県生まれ。東京大学大学院修士課程修了。学生時代から予備校などで受験生を指導。93年、大学院の同級生らと、低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した学習室「花まる学習会」を設立。著書に『小3までに育てたい算数脳』（健康ジャーナル社）、『算数脳パズルなぞべ〜』（草思社）など。

幼児の外遊び体験が算数脳の大きな幹を作る

数の概念を身につけさせるために、もっとも効果的な方法は、1から100までの数を、ひとつの抜けもなく完璧に言えるようにすることです。幼児はCMや流行語をすぐに覚えてしまうように、耳に入ってきた音を再現する力に優れています。そんな時期だからこそ数唱を繰り返し、数は積み上がっていくということを理解させましょう。

子どもは数えるのが大好き。 生活の中にある本物の数を 自由に数えさせましょう

わたしの失敗

お風呂で数かぞえをスパルタで特訓

年中の頃、お風呂の中で20までの数数えの練習。ところが娘はどうしても17を飛ばしてしまうのです。「また間違えた。もう1回」と、数えられるまで出させないつもりでいたら、途中で「気持ち悪い」と言ってゲ〜……。あとの入浴はシャワーになってしまいました。北国の真冬の出来事です。（新潟県 あおいママ）

生活の中にある「本物」を数えさせることも大切です。たとえば「リングを4個持ってきて」と言って、お手伝いをさせましょう。自分の手で運ぶリングの数を体感することで数に対する具体的なイメージが身につきます。

それはやがて、問題文を読むだけで頭の中で立体を組み立てられたり、図解したりする力となります。これを私は「見える力」と呼んでいます。さらに、問題文に取り組むときは、出題意図や問題文を読み落とさない集中力、最後

高濱先生に聞いた 算数脳を鍛える 三つのポイント

声に出して
数え数の概念を
覚えさせる
(数唱)

物の数を
数えさせ、
体感で数量の
イメージをつくる

自然は
「算数の元」が
いっぱい。幼児は
外遊びが大切

わたしの失敗

10のあとは11って誰が決めたの？

息子は数字がとても苦手。1から10までしか理解できず、なぜ10のあとは11、12、13……と続くのが納得できないみたいで、「どうしてそうなの？ 誰が決めたの？」と質問してきます。大人の感覚からすればアホだけど、人と違う感性を持った子なんだと親バカしてます。（千葉県 S・Hさん）

まで解こうとする意志の力も必要です。これを「詰める力」と呼び、この二つを合わせたものが「算数脳」です。算数脳は論理的思考⇨考える力の元です。これは算数に限った能力ではなく、社会に出てから最も必要とされる「頭の良さ」に通じるのではないのでしょうか。そして算数脳を鍛える教材は、先に紹介したお手伝いのように、親御さんと一緒に過ごす日常生活の中に散りばめられています。

その中で最も効果があるのが外遊びです。たとえば木登り。安全に登るためには三次元に伸びた枝の位置を見極め、同時に体重をかけても大丈夫な枝の太さを判断し、足をかける位置を決めなければなりません。これは「空間把握力」です。遊びを積み重ねることで、こんな能力が鍛えられているのです。そのとき、「こうしたらもっと簡単に

登れるよ」と口出ししてはダメです。夢中になって何回もトライする集中力こそ、算数脳の幹だからです。ヘトヘトになるまで外遊びをした子ほど、自然と算数脳が育まれているんですよ。